

「近代住宅史から見た壽岳文章邸 —壽岳邸の建築史的価値について—」

京都市文化財保護課 石川 祐一

1. 近代の邸宅建築

明治以降、西洋建築の移入によって、洋風の邸宅建築が建設される。明治20年代以降になると、大規模な邸宅建築として、接客空間である洋館と生活空間である和館を接続した「和洋併置式」住宅が建てられた。その後、洋館の内部に和室を設ける形式の洋風も現れる。

こうした大規模な洋風の邸宅建築は、主に華族や政財界人などの上流階級の住宅として建てられたものであった（東京・岩崎家住宅、京都・長樂館など）。

2. 中流階級のための住宅の成立

明治の終わり頃より、ホワイトカラーを中心とした「中流階級」が成立すると、彼らのための住まいが必要とされる。これらの人たちは都市で働き、郊外に住もうというライフスタイルを志向することが多かった。これは交通網の整備によって郊外からの通勤が可能になり、郊外住宅地が開発されたことによっている。郊外住宅として、和と洋の外観を有する住宅群が建てられたが、中でも応接空間を洋室とする和風住宅が数多く建てられた。これは明治以来の和洋空間の接続をコンパクトにしたものであり、また、生活改善運動の影響を受け洋風空間を取り入れようとした志向によっている。

この中流階級のための郊外住宅を平面からみると、中廊下式平面（大正初期～）[図1]と、居間中心式平面（大正後半～）[図2]の二つに大別される。前者は中廊下を設けて部屋を通過せずに各室へ行くことが可能になり、プライバシーの確保という点で近代的住宅の一面を持つ。しかし表に応接室や座敷を並べ、内向きは裏や北側に配置するなど家族本位の住宅とはいえない保守的なものである。これに対し居間中心式はモダンリビングといわれるもので、南側の中心に居間を配置し、

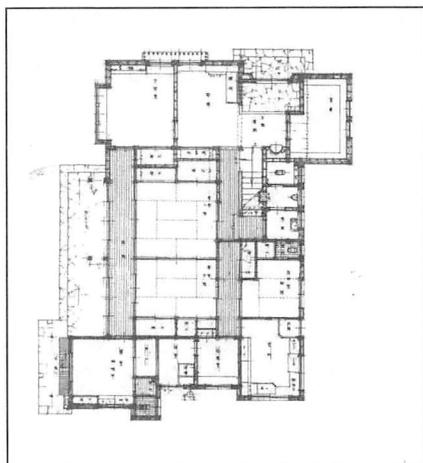


図1. 中廊下式平面（1階）

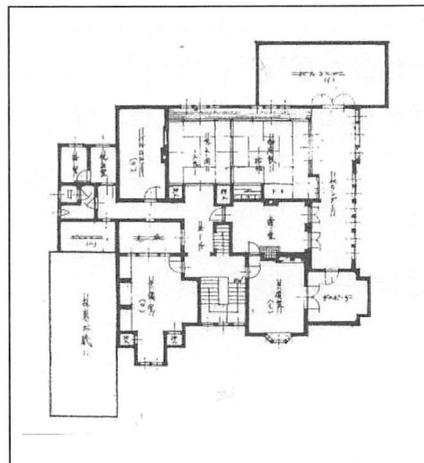


図2. 居間中心式平面（1階）

居間から各室につながる家族生活を中心に据えたものである。こうしたモダン住宅は京都ではアメリカ人の建築家、W・M・ヴォーリズや武田五一、さらに藤井厚二などの建築家によって普及されていく。このような洋風住宅を広く普及させ、新たな需要に応じて供給するのは建築家ではなく、工務店・大工の役割であった。京都では、この郊外住宅を中心的に担ったのは、京都あめりか屋と壽岳邸の建築にもあたった熊倉工務店であった。

3. 熊倉工務店

熊倉工務店は熊倉吉太良（1894-1982）によって会社の基礎が築かれた。棟梁として三高・京都帝国大学の施設施工に参加し、これを契機に京大建築学科の人脈とのつながりを持った。大正9（1920）年、建築学科を創設した教授の武田五一（1872-1938）をはじめ、藤井厚二（1888-1938）、永瀬狂三（1877-1955）、壽岳邸の設計にあたった澤島英太郎（1904-1945）などの建築家グループとの交流を通して彼らの住宅建築の作風を吸収した。

大正末期以降、熊倉工務店はアールデコやスパニッシュ、チューダー様式などの当時流行の様式を取り入れ、施主の要望に沿って、多様な新しい和風・洋風住宅を供給していった。熊倉吉太良は藤井厚二に心酔していたとされ、藤井風の作風を多くとりいれている。

また、熊倉は民芸運動に共鳴し、民家風、民芸風の住宅を施工している。吉太良と民芸との出会いは陶芸家で民芸運動の主要メンバーである河井寛次郎と住まいが近く、親交があったことによる。河井邸（現河井寛次郎記念館）の囲炉裏の意匠の影響を受けた民芸風の住宅も多い。

4. 壽岳文章邸の建築

壽岳邸は昭和9（1934）年竣工、設計は前掲の澤島英太郎、施工は熊倉工務店である。澤島は師匠の武田五一を通じて熊倉との交流があった。様式は先の中廊下式平面の郊外住宅を踏襲しているが、書庫と書斎を北側に配置しているため、やや変則的である[図3]。意匠的には藤井厚二の影響と、民芸運動の影響を受けている。

藤井厚二は、単に西洋建築を摸するのではなく、日本の風土に適合した新しい近代住宅を建てようとしていくつかの実験住宅を建てた。現存する大山崎の「聴竹居」は数寄屋風という日本建築のアイテムを用いながら近代的洋風空間にアレンジしている。これが藤井の特徴的な手法である。壽岳邸の外観[Ⅰ]も藤井厚二風のデザインが色濃いと見える。

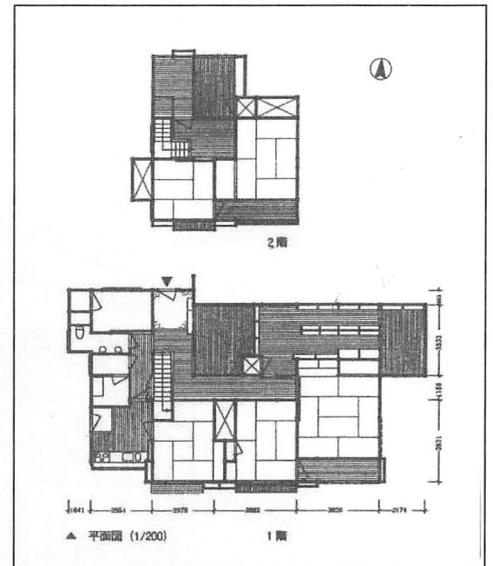


図3. 壽岳邸平面

澤島英太郎も藤井の影響を受けており、壽岳邸のいたるところにそれをみることができる。玄関から入ってすぐ左の応接室の床の間[Ⅱ]、座敷の違い棚[Ⅲ]はともに藤井のデザインの影響が強い。とくに珍しい窓つきの違い棚は、通気や採光に配慮した藤井の住宅環境学を生かしている。これはまた書庫[Ⅳ]にも見られ、北側に配置して、上の欄間に通気・換気の配慮がされている。

壽岳氏は、自宅の建築にあたって民芸に関する意匠的趣味を反映させなかったといえる。後に『私

と民芸品』(1980年)のなかで「民芸を意識しないで建てた家でも、家具や調度品に民芸品を入れ、三十年の風雪に耐えると、どことなく民芸的な格ができる」とみえ、私の家にやってくる人は、純粹の民芸の暮らしに徹していると思うらしい」と書いており、単に民芸風の意匠を用いるということではない民芸観をかいま見ることができる。

5. 壽岳邸の建築史的価値

壽岳邸の建築史的価値として、次の点をあげることができる。

(1) 大正から昭和初期につくられた、中廊下式平面を持つ郊外住宅の一つとして位置づけられる。

(2) 意匠や建築環境への考え方(通風、換気など)の設計において、建築家・藤井厚二の影響を、色濃く受けている。

(3) この背景には建築家と工務店とのコラボレーションがある。施工の担い手である工務店が建築家との交流によって作風や設計スキルを吸収して、一般に普及させていく役割を果たしている。

(4) 民芸運動の視点から、重要な住宅である。民芸運動が展開した場であるとともに、内部意匠や調度品には、施主である壽岳文章の民芸観があらわれている。

(5) 「文化人」壽岳文章の邸宅としての歴史的・文化的価値を有する。文化活動の場としての価値に加え、著述家の住宅として書庫の空間が付加され、資料の保存のために通風・換気に配慮した設計がなされている点に建築的な特徴が見られる。

このように、壽岳邸は、様々な切り口からアプローチすることのできる住宅建築である。



I. 壽岳邸(向日庵)



II. 応接間



III. 座敷・違い棚



IV. 一階書庫

(文字起こし、長尾史子)

参考文献

石川祐一『近代建築の夜明け 京都熊倉工務店—洋風住宅建築の歴史』(淡交社 2006 年、共著)

壽岳和子『地上の星座 壽岳潤追悼集』(2012 年)

注

- * 図面は石川氏上掲書・図 1 は山内邸住宅、図 2 は河合邸住宅、図 3 は講演資料より。
- * 写真 I は石川氏上掲書、II～IV は壽岳和子氏からの提供による。

本講演の一部は、『乙訓文化遺産 20 号』(乙訓の文化遺産を守る会 2016 年 1 月発行)に掲載されている。